

三田メディアセンターのオリエンテーション

おかだ まさひろ
岡田 将彦
(三田メディアセンター)

1 はじめに

三田メディアセンターの春は、日吉から来たばかりの学生たちで賑わう。中でもゼミに所属したばかりの3年生は、ゼミの課題や三田祭論文の執筆に向けて、図書館をうまく使うことの必要性を認識し始める時期である。そして、4年生は自身の卒業論文執筆に向けて、データベースの使い方といった、より発展的な図書館サービスを求め始める。三田メディアセンターで行っているオリエンテーションは、そんな三田に来てゼミに所属したばかりの学生や、卒業論文の執筆を控えた学生が主な対象となる。

三田メディアセンターのオリエンテーションの歴史は長く、1980年代には館内ツアーと資料紹介を組み合わせた図書館ツアーが定着し、その後ビデオ上映会や、日時と会場を設定したデータベース体験講座、ゼミ単位のオリエンテーションなどが行われてきた¹⁾。現在は、「文献探索ツアー」、「データベース体験講座」、「引用・参考文献の基礎講座」の3つを基本にオリエンテーションを行っている。主にゼミを対象とし、参加者が希望する時間に実施しているオンデマンド型のオリエンテーションである。本

稿では、これらオリエンテーションについて2014～2015年度に行った体制の変更や、新規メニュー立ち上げなどの取り組みを中心に報告する。

2 オリエンテーションの現況

三田メディアセンターで行っている3つのオリエンテーションの概要と、2014年度の実施回数、参加者数を表1にまとめた。

実施回数の大部分を占めているのが、「文献探索ツアー」である。「文献探索ツアー」は、図書・雑誌論文の探し方やデータベースの使い方などを説明する講義部分と、実際に図書館の中を歩きながら基本資料の配置を説明する図書館ツアーがセットになったオリエンテーションである。開催のほとんどが春学期の4～5月に集中している。「文献探索ツアー」では、参加ゼミに合わせて紹介するデータベースや資料を決めているため、この時期は担当者にとって忙しい日が続くこととなる。

「データベース体験講座」は、特定のデータベースについてパソコンを使って実習をしながら学ぶことのできるオリエンテーションである。開催件数

表1 オリエンテーションの概要

	文献探索ツアー	データベース体験講座	引用・参考文献の基礎講座
内 容	図書館のサービスの紹介 KOSMOS（慶應の蔵書検索システム）の使い方 雑誌論文の探し方 データベースの紹介 館内を実際に歩きながら資料紹介	データベースの実習	引用と剽窃の違い 引用の仕方 参考文献リストの作り方 引用と参考文献リストの対応
形 式	講義 図書館ツアー	講義 実習	講義
場 所	オリエンテーションエリア 図書館新館、旧館、南館	パソコン室	オリエンテーションエリア
担 当 者	主担当： レファレンス、雑誌、スペシャルコレクション担当 図書館ツアー： 三田メディアセンター職員全体	レファレンス担当	レファレンス担当
実施回数（回）	80	8	23
参加者数（人）	985	127	268

自体は少ないが、「文献探索ツアー」よりも発展的な内容を知りたいというゼミが申し込んでくることが多い。3年次に「文献探索ツアー」を、4年次に「データベース体験講座」を受講するゼミもある。「文献探索ツアー」と「データベース体験講座」に参加したゼミには、当日紹介した資料をまとめた「ゼミ別基本資料」というページをウェブ上に作成している²⁾³⁾。

「引用・参考文献の基礎講座」は、2014年秋に新設したオリエンテーションである。詳しくは、『4.「引用・参考文献の基礎講座」の新設』で述べる。

これらのオリエンテーションの他に、大学院新生向け図書館ツアーや法務研究科の新生に特化した図書館ツアー、通信教育課程生を対象としたセミナーも用意している。これらは、担当部署である学生部や通信教育部と連携を取りながら実施している。

3 「文献探索ツアー」実施体制の見直し

最も実施回数が多く、オリエンテーションの柱ともいえる「文献探索ツアー」だが、いくつか課題があった。

一つは開催スペースの問題である。レファレンスカウンター横のデータベースエリアで講義を行っていたのだが、座席を設置できるスペースが非常に狭く同時に受講できる人数は15名程度が限界であった。大人数のゼミの場合は、前後半に分け1コマの中で対応していたが、それでも30名を超えるゼミの場合は1コマで受けるのは難しいという状況であった。

もう一つの課題は、ゼミのある4、5限など特定の時間帯に開催希望が集中するということである。そのため、日程の調整がどうしてもつかず、開催を

あきらめざるを得ないケースが年に数回生じていた。

これらの課題を解消するために、2014年春にこれまでのデータベースエリアを改修し、40名程度まで一斉に受講することのできるオリエンテーションエリアを新設した。加えて、「文献探索ツアー」がオリエンテーションエリアを使う講義部分と、使わないで実施することのできるツアー部分に分かれていることを利用し、1コマに2つのゼミを対象に同時開催することとした。

同時開催のためには、「文献探索ツアー」を担当することのできる人員の補強が必要であった。2013年度まではレファレンス担当と雑誌担当中心に行っていた「文献探索ツアー」だが、2014年度からは、三田メディアセンター全体として取り組む体制へと変更した。ツアープランの作成や紹介する資料の選定、オリエンテーションエリアでの講義部分は、レファレンス担当、スペシャルコレクション担当、雑誌担当が行い、館内ツアーの部分は閲覧担当、選書担当、相互協力担当の協力を得た。

これらの見直しにより、学生の希望する時間帯での「文献探索ツアー」開催が格段に増えた。2014年度と2015年度の春学期は、開催を断念するというケースは0件であった。また、これまでレファレンス担当を中心に行ってきた「文献探索ツアー」だが、他担当からの意見や専門分野の知識を、積極的にツアーの内容に反映できる体制となったことも見直しによる効果かと思う。

4 「引用・参考文献の基礎講座」の新設

三田メディアセンターが2014年度に取り組んだ利用者ニーズに関する調査では、「引用」について図



図1 改修したオリエンテーションエリア



図2 「文献探索ツアー」の様子

表2 「引用・参考文献の基礎講座」のアンケート結果

回答数

252人 (回答率94%)

理解度の平均

4.67 (5点満点)

期待していた内容(複数回答)(人)

引用と剽窃の違い	引用の仕方	参考文献リスト	引用とリストの対応	特定のスタイル	文献管理ツール	その他
37	149	120	65	23	42	0

引用を意識し始めた時期(人)

2年生まで	3年	4年	意識していない
95	130	6	14

書館で教えてほしいという声が、教員・学生双方から聞かれた。また、オリエンテーション全体の課題としても開催が春学期に集中する一方、秋学期は実施回数が激減してしまうということもあり、「引用・参考文献の基礎講座」を新設した。内容は、「引用と剽窃の違い」、「引用の仕方」、「参考文献リストの作成」、「引用箇所と参考文献リストの対応方法」といった基本的な事項とした。このオリエンテーションに参加することで、引用するうえで注意するポイントが理解でき、必要に応じて自らスタイルマニュアルを確認できるような講義内容を考えた。また、引用についての疑問はレファレンス担当に聞けばよいという宣伝も積極的に行った。

2014年秋学期の「引用・参考文献の基礎講座」実施回数は23回、参加者数は268名であった。新設ということもありアンケート用紙を配布し、252名(94%)からの回答を得た。アンケートから得た情報は、適宜、講義内容に反映させていった。アンケート結果を表2に示す。

理解度の平均値は4.67(5点満点)と高く、引用・参考文献の基礎はおおむね理解してもらえたかと思う。この講座に期待していた内容としては、「引用の仕方」(149名)や「参考文献リストの作り方」(120名)など、基本的な内容が高かった。一方、「特定のスタイルの解説」(23名)や、「文献管理ツールの解説」(42名)に対する事前の期待値はそれほど高くなかったが、これは引用スタイルや、文献管理ツール自体を、「引用・参考文献の基礎講座」を受けた時点では知らない学生が多いことが影響しているのではないと思われる。

引用の重要性を意識し始める時期については、3年生になってからという学生が130名と過半数を占めている。1, 2年時にも引用についての説明を受けているかと思うが、ゼミに所属し研究活動を始める時期に、再度引用について学ぶ意義は大きい。

5 ゼミとの関係強化

2015年度の春学期は、これまで以上にゼミとの関係を強化することに力を入れた。取り組んだのが、オリエンテーション参加者からのフィードバックの取得である。「文献探索ツアー」は三田メディアセンターで長く続いている取り組みであり、すでに定着しているといえる。だが一方で、どこかの時点で参加者からのフィードバックを得て、内容を見直したいという思いもあった。加えて、フィードバック取得の過程で、ゼミとのやりとりを増やすことで、ゼミとの関係を強化したいという狙いもあった。

フィードバックの取得を考えた時、3, 4年生となると、ゼミ毎、さらに言えば個人毎の図書館の利用経験は大きく異なる。ゼミ単位を基本にオリエンテーションを実施している三田メディアセンターでは、全体の平均値を取得するようなデータを得ても、オリエンテーションの内容に反映させていくことは難しいと考えた。

すぐに活かせるような調査項目として、「図書館オリエンテーションに追加してほしい内容」、「ゼミ別基本資料に追加してほしい資料・データベース」、「その他要望」など、自由記述の質問を多く設定した。

フィードバックの取得方法としては、LibSurveysというオンラインアンケートフォームを採用した⁴⁾。

オンラインアンケートフォームを採用した理由は、春学期は繁忙期の為データ処理に時間を割く余裕がない、オリエンテーション自体で90分目いっぱい使用するためアンケート記入の時間を取るのが難しい、という2点である。デメリットとしては、その場でアンケート用紙を配布する方法と比べると回収率の減少が予想されるということである。

アンケートフォームはゼミ別基本資料の中に埋め込み、講義後にゼミ別基本資料に目を通したうえで回答してもらうような仕組みとした。講義後にオリエンテーション参加のお礼とフォローアップのメールを教員やゼミの代表者に送付し、その中でアンケートへの回答を依頼した。

2015年春に実施した調査の回答者数は74人（回答率8.1%）と少なくはあったが、オンラインアンケートフォームを利用したことで、自由記入欄の記述が充実していた。特に教員や大学院生からは、オリエンテーション前後の懇談だけでは得られない具体的な助言があり大変参考になった。

「図書館オリエンテーションに追加してほしい内容」としては、データベースについてもっと詳しく知りたいという声が多かった。これについては、すでに実施している「データベース体験講座」の需要として再確認することができた。

「ゼミ別基本資料に追加してほしい資料・データベース」として挙げられたものについては、ツアー担当者が希望資料の内容を確認し適宜追加した。中には追加資料をリストで提供して下さる教員もあり、そのようなゼミには、より充実した資料リストを作成できている。

また、フィードバックを実施する中でウェブ上で公開しているゼミ別基本資料に誘導することで、ゼミ別基本資料へのアクセス数は昨年同時期までの1.5倍ほどに増加した。オリエンテーションに参加した直後にゼミ別基本資料へアクセスする機会を作ることが、その後の利用に繋がっているといえる。

加えて、体感ではあるが、ツアーに参加した学生がレファレンスカウンターを訪ねてくる頻度が増えており、ゼミとの関係強化という点で一定の効果を収めていると考えている。

6 オリエンテーションの今後

これらのオリエンテーションを、ゼミの活動に

とって最適な時期に提供していくことが重要である。「文献探索ツアー」を受けた学生が、次のステップとして「引用・参考文献の基礎講座」や「データベース体験講座」を受けるといように連続性のあるものとして定着させることができればと思う。

また、4学期制や国際化の流れの中で、図書館側としても開催時期や英語によるオリエンテーションなどへのニーズにも柔軟に対応できるように、体制を整えていく必要がある。

引用・参考文献

- 1) 石黒敦子ほか. 慶應義塾図書館史稿1970-2012: 開館100年記念. 慶應義塾図書館, 2012, 225p.
- 2) ゼミ別基本資料. 慶應義塾図書館ウェブサイト.
<http://www.mita.lib.keio.ac.jp/search/zemi/index.html>
(2015-07-31参照)
- 3) ゼミ別基本資料はLibGuidesを用いて作成している。LibGuidesの詳細は本号の「LibGuidesの導入と活用」で報告しているので参照してほしい。
- 4) LibSurveysは、LibGuidesの機能の一部である。アンケートフォームは、LibGuidesで作成した「ゼミ別基本資料」の中に簡単に埋め込むことができる。